
魔王につき

楠木あいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王につき

【Nコード】

N4832T

【作者名】

楠木あいら

【あらすじ】

魔王が破産するというギャグものです。
日記形式で書いています。
ブログでは顔文字付きで載せています。

魔王、破産する

1 魔王破産する

ワシは魔王。

暗黒の地で人間どもに恐怖をいだかせ破壊と殺戮を繰り返す破滅の王。黒竜にまたがり、何万ものモンスター軍団を率いて大地を血に染め上げていた……ていたのだ。

黒き栄光が暗転したのは、冥王の息子が持ち出した投資話に乗ってしまった事から始まる。

「今は投資で儲ける時代ですよ」

人間から強奪して富を得てきたワシにとってみれば、儲けなど考えてもみないもんだよ。幻の巨大鳥から取った骨と紅竜の皮でできたオーダーメイドの玉座に座り、金のゴブレットに注がれるワインは極上ランク以下はない。そんな日々を送ってきたんだ。更に儲けなんて気はなかったのだが、目を輝かして語る冥王の息子に「面白そうだな」と思ってしまった。もちろん、株は損をするとも聞いてたよ。損してもまた人間どもから巻き上げればいいと思っていた。最初はうまくいった。まあ、だいたい物事はそんなもんだよ。うまくいくから大失敗する典型的なパターンだ。

「すごいですよ。買った影商事の株価が上昇し続けてます」

冥王の息子は、さらに次の投資話を持ちかけ、その儲け話を聞きつけた奴らが次々と城にやってきて、ワシも断る事もなく次々と株を買い、儲けた。

そして破滅がやってきた。

冥土ショックと関係者たちは言っていたな。もともとあの世なんだから、これ以上のショックはないじゃないのかと思うが……。

とにかく、株価は暴落し、あれよあれよという間にワシの資産は底をつき、さらに地下を掘り始めた。借金というやつだよ。

はああ

いかん、ため息が漏れてしまった。

魔王が借金と聞いて、部下たちが城を離れた。幹部たちは親が兄弟が子供が不治の病にかかったから故郷に戻って看病したいと口を揃え荷物をまとめた。食い扶持がないと知った下級モンスターたちは蜘蛛の子を散らすように姿を消した。

城内は荒れ始め、そして奴がきた。

『差し押さえ』とかかれた札を持って。七三に分けたスーツの男たちが城のいたるところに札を貼り付けた。しかもこの札、サンダーボルトの魔法がかかったマジックアイテムで剥がそうとしたら魔王の体でさえビリビリとくるとんでもない代物だ。

「城がワシの城が……」

巨万の富と破壊と滅亡の魔王はこうして城を追い出された。破壊の王は破産の王になってしまったのだ。

2 魔王さまよう

灰色月2日

今日から日記をつける事にした。

いつか借金を返して城に戻ってくるだろう。再び巨万の富を手に入れて贅沢な日々が当たり前になった頃に読み直して、二度とこんな事がないように自分にムチを入れるために。

城を後にして、どうするかが問題だ。冥土やモンスターが住む暗黒地区で細々と暮らそうかと考えたが、ホームレスの魔王を元部下たちに見られたくない。魔王にだってプライドはあるのだよ。いや、魔王なんだからプライド自体持っている。ん？何か書いてて悲しくなってきた……。

暗黒地区を離れよう！
新しい生活を始めるのだ！

灰色月3日

財産ゼロというかマイナスなんだが、とにかく生活していくためにはゴールドが必要。今着ている一流のデザイナーにつくらせたオーダーメイド服やアクセサリを売ることにした。もちろん、安い服を買うつもりだよ。裸でうろつく変態魔王で捕まりたくない。

よく、巨万の富を持ち贅沢三昧してきた者が、一般人の住む地区に迷い込んでぼったくられる笑い話がある。ワシも笑い話の一員になるのかのう。『破産魔王 涙の笑い話』とかタイトルつけられて。

『何でも買い取ります。お気楽にご相談ください』と書かれた看板をみつけ、ワシは風のように入った。ここはまだ暗黒地区だから元部下に見られたくないからのう。

運良く店内に客はなく買い取りコーナーを目にしたワシは大急ぎで服やアクセサリをカウンターに置いた。力が入ってミシミシと聞こえたがワシは気にしない。

「買い取ってくれ」

「ひいひい」

店員は悲鳴を上げて逃げ出そうとしたが：何とか買い取ってくれた。はて、笑い話にはならなかったな。そういえば、ワシは魔王だった。質素な服を着てフードで顔を隠したとしても魔王の恐怖オーラが漂っていたらしい。

灰色月4日

手に入ったゴールドで新天地を探すことにした。暗黒地区を出てどこに行こうか。天空の者が住む百光地区は抹殺される危険がある

から論外。妖精地区も住みづらそうだ。想像してみなさい花畑にた
たずむ魔王を。できれば、ワシを魔王と知らない所が良い。

………

人間界だ。

人間は多すぎるほどいるから、魔王を知らない人間だっているは
ず。

人間界か、ワシ肌が灰色しているから目立つかのう。暗黒地区の
リサイクルショップの店員だって逃げだそうとしたし。うーん……
：。うん、悩んでもしかたない。悩んでいる魔王なんて格好悪い。
魔王は笑ってこそ魔王。うん、我ながら良い事を書いた。今日はこ
こまでにして明日に備えよう。

緑月15日

感動の人間世界にたどり着いたよ日記から、2週間が過ぎてしま
った。

毎日かかさずに書こうと決心したのに：

緑月20日

また、5日日記をサボってしまったが、まあ、そんな事はどうで
も良い。今日は超運命的な日になった。

森を歩いていたら、キノコのモンスターに囲まれてしまった。
マズイ事になった。

知能の低いキノコ達は魔王であるワシを獲物にしようとしたのだ。
「何をする、こら、後ろをつつくな。

わあ、ほ、胞子が目に入ったではないか！

ワシは魔王だぞっ」

魔王、とうとう窮地に立たされてしまったのだ。

「へるぷみー」

思わず叫んでしまったよ。

そんなワシに神は見捨てなかった、いや魔王だから神なんていないのだが……。

窮地に陥ったワシに手を差し出してくれた人間がいたいた。その人間はキノコを退治してくれたのだ。何て良い人なんだろう。というか、ワシ、どんだけ弱いんだ……涙が出てきた。いや、これは胞子のせいだ。

緑月21日

『村人募集・空き家 あります』

という看板を見つけた。魔王にも幸福が舞い降りてくれたのだよ。灰色肌という不気味な格好にもかかわらず村長は、快く迎え入れてくれた。

「最近、目が悪くなったのう」

そんな事を言っていたけれども……

新しい我が家は、ホコリをかぶっていたが生活に必要な家具とかは揃っていた。

村長の温かい気配りに超感謝しつつワシは掃除にとりかかった。掃除は昼頃に終わり、お昼に村長の娘さんがお弁当を届けてくれた。魔王、村長の家に足を向けて寝れないよ。

「これから、長い返済で大変かもしれないけれども、頑張ってね」
帰り際、娘さんはニコツと笑いながら一枚の紙を手渡し帰って行った。

紙には……契約書？家購入？に、にっにじゅうまんごーるど……20万ゴールド！！

ワシ、また借金っすか!!!

3 魔王、村人になる

緑月22日

すっかり忘れてたが行商人から本を買っていたんだっけ。

リモット村で生活していく以上、村人とうまくつきあっていかなければならない。魔王としては超一流だが、村人は素人(?)だからのう。本を読んでおいたほうが良いだろう。

「はじめての定住&永住」によると、なにになにお隣さんにご挨拶するのはマナーか。なるほどなるほど。

さっそく引越しそばを持って隣さんのドアをノックした。

「あのう、初めまして、隣に引越して……あーっ、あなたはっあの時の」

な、なんと。なんとなんなんだよ。お隣はあの時に助けてくれた……えーっと月日にキノコの魔の手から救ってくれた恩人さんだったのだ。

魔王、超驚き、超嬉しい!

橙月5日

日記を2週間ほどサボった事は置いて……

お隣さん、ヴィスナーっと言ってたな。うん、良い人だよ。作りすぎたおかずを受け取ってくれるんだよ。

ああ、これは本に載っていたんだ。わざと作りすぎてご近所さんにプレゼント作戦すれば、イメージアップになると。

とはいえワシ魔王やねん。外見恐いねん。

引越してきたばかりの頃はもっとひどかったんだよ。村人Bのおばあさんなんて目があっただけで悲鳴を上げて逃げ出したんだか

ら……

今もワシを遠巻きにみる村人の方が多く中、ヴィスナー君だけは作りすぎたおかずを受け取ってくれて、しかも、この事を話したら「大丈夫ですよ。皆、マオーさんの温かさに気づいてくれますよ」ヴィスナー君、超良い人だよ。

ワシはこれ以降、ヴィスナー君を心の友、親友の称号を贈ることにした。

魔王、村人になる

橙月6日

ワシ、何をしているんだろうか……。

日々の生活に追われ忘れていたが、ワシは魔王なんだよ。

人間どもを恐怖に陥れる破滅の王や！

忘れてはいかん。思い出せ魔王よ。

体を巡る黒き血の残忍さを

さあ、笑え魔王、大地を震わせ人間どもを絶望させる笑いを

「ふはは、……あ、床が汚れている」

いかんいかん、掃除するのを忘れてた。

そうそう、塩をきらしていたんだ、店が閉まる前に買っておかない。

橙月7日

行商人から買った『自給自足Q&A』のおかげでささやかながら野菜を作る日々が続いておる。

借金返済中…の家に小さな（魔王が大の字で寝れるぐらいかの）畑があって、自給自足すれば生活が楽になると思って始めたのだ。

最近、親友ヴィスナー以外の人からも声をかけてくれるようになって、じんわりと温かい幸せを感じるなあ。

村人Bのおばあさんと会話できる日も近いかな…

魔王超充実中

4 魔王、木こりになる

橙月8日

家の返済するためにも、伐採の仕事を始めることにした。魔王だって働くねん。

明日から、村人Dさんと森に行くので、今日は早く就寝しようっと。

伐採って斧で木をカコーンカコーンってやるんだろ。魔王できるかな、ちよっとドキドキ。

どうしよう眠れそうもない……

行商人から難しい本を買っておけばよかった。

橙月9日

ちよーつかれた。まおー、もうねます。

橙月16日

一週間前の日記は何なんだ。魔王、読み直して恥ずかしくなったよ。

まあ、伐採の仕事を始めた日の夜だから、仕方ないのだが……。伐採の仕事は、超キツイよ。ワシが魔王でも、キノコに襲われる魔王だけでも……いや、HPはすごいだぞ、これぞラスボスっていうぐらい。って日記に言い訳書いているんだ、いいわけがない！

… … …

こほん。さて、ああ伐採の仕事だったな。重労働だが、良いものだ。気持ちよい疲れだ。

生きているってすばらしいものだな。

ただ、そう言いきれるのは、もうちよっと過ぎてからかな。魔王、

今はまだ疲れと筋肉痛でへろへろ。
とはいえ借金返済のため明日も頑張る！

橙月18日

村長の娘アリアがしているペンダントは母親の形見と教えてくれた。

アリアは笑っていられる。

悲しい事があったのに。村人やワシに見せる笑顔は柔らかくて優しい。

アリアがまぶしく見えた。人は、アリアは魔王より強い。

橙月22日

森の中で花畑を見つけた。伐採という重労働に明け暮れる日々。色とりどりの花は魔王の心にしみる。

蝶々が飛んでいるよ。蝶々さんコンニチハ。

「あのーマオーさん……」

一緒に伐採仕事している村人Dさんに見られちゃったよ。魔王、超恥ずかしかった。

5魔王と村人

橙月23日

一つ、困った事が起きてしまった。魔王、これから心配……

畑仕事した時、うっかり鎌で切っちゃった、てへっ。

しかし、それを村人Bのおばあさんに見られてしまったのだよ。魔王、血の色がブラックやねん。

村人Bさん、すごく驚いてた……もしかして魔王だって事バレちゃった？

橙月28日

うーん。黒い血見られちゃった事件以来、村人の視線が変なような気がする……。

親友に相談してみようかな。でも、何て言う？

「ワシ、魔王だって事がバレちゃったでしょう」って……。

親友にも魔王だって事言っていないのに。思い切って親友には話そうかな。

橙月30日

親友ヴィスナーに、本当の事を話す事にした。

親友と言っておきながら隠し事してはいけないと気づいた。

ヴィスナーは何て言葉を返すのだろうか？

魔王は人間の敵、剣をワシを助けてくれたあの剣でワシを倒そうとするのだろうか？

もしそうならワシはどうしよう。魔王に戻るのか？人間を絶望に陥れた魔王に。

……

考えてはいけない。すべては明日、どうなるのか、どうするのかは、その時決めることにした。

橙月31日

ワシは焼いたクッキーを手にして、ヴィスナー宅のドアをノックしようとした。

「聞いているんですか、ヴィスナーさんっ」

扉に触れようとした拳を止めた。どうやら先客がいるらしい。

ワシは身を低くして窓際に向かった。

開かれたドアから覗いてみると、町の人たちが椅子に座っているヴィスナーを取り囲んでいた。

「マオーちゃんは、魔王なんだよ」

「もしこのまま魔王を村に置いたら、どうなることか」

「村に魔王の部下がきて滅ぼされてしまう」

いや、世界が滅亡してしまう」

……

村人たちはワシを恐れていた。

そしてヴィスナーにワシを退治してくれと頼みにきたのだ。

「……………」

取り囲まれたヴィスナーは立ち上がった。

立ち上がる一瞬が長く感じた。

ああ、ここまでか。親友ヴィスナーもワシを魔王として見つめ……そして

「待ってください」。

確かにマオーさんは黒い血を持つ魔王かもしれません。

しかし、マオーさんが俺たちに襲いかかったことがありますか？
手料理を配ったり、木を伐ったり農作業しているマオーさんが世界を滅ぼそうと思いませんか？」

村人たちはしいんとした。反論する者はいない。

「俺は信じます。マオーさんは、素晴らしい隣人さんでいられる事を」

「ううヴィスナーくん、やはり、君はワシの親友だっ」

親友ヴィスナーの発言に、ワシは涙をちょちょびらし、隠れていた事をわすれて声をあげた。

「ま、マオー…さん…」

涙と鼻水を流すワシを見た村人たちは、ワシにかけた誤解を解いてくれた。

使い魔と妖精と勇者候補

5 魔王と妖精と鶏

白月25日

村の皆がワシを温かい目で見てくれるようになった。魔王、超うれしー

そんな中、事件が起きてしまったのだ。

夕方、家に向かう途中で一匹の雄鶏が道のだ真ん中にいた。

「探しましたよ、魔王様」

「ににに、鶏が口を開いた。ぎゃー」

驚き、逃げ出しそうとしたワシに鶏は飛び掛った。

「あら、マオーちゃん。鶏に遊ばれて楽しそうね」

倒れたワシの上に乗る雄鶏を見て、村人Bおばーちゃんは笑っていた。

白月26日

雄鶏を家に連れて帰り、一晩が明けた。

人間の言葉をしゃべる鶏は、ワシの使い間オードリイだった。魔界の姿だと人間世界で大変なことになるから変身しているという。

オードリイはワシに朗報を届けてくれた。

な、なんと冥府の王様が借金を肩代わりしてくれたのだ。

魔王が株で破産したのは息子のせいだから、世間体をきにして…まあ、大人の事情というものだ。

「城に仕えていたモンスターたちも戻ってきました。あとは魔王様に戻るだけですよ」

「じゃあ、ワシ、魔界に……」

魔界に帰れる」

「もちろん、人間世界の借金を返済してからです。この家の返済があるんですよ」

がーん

「冥府王の借金は魔界だけです。第一、魔界のお金は通用しません。踏み倒すものならば、天界のいい笑いもんです。

いいですね、きっちり稼いでくださいよ」

世の中は非情だ……

あ、雄鶏だからオードリィ……魔王、超ウケルんですけどー

「コケッ、コーー」

「ぎゃー、痛い痛いっ」

日記を見たオードリィにつっつかれたよ。ワシ魔王なのに……

白月28日

リモット村に行商人がやってきた。

村の雑貨屋にはないめずらしい物ばかり。魔王だったまにはシヨピング。

「どうだい、オードリィ。行商人からすてきなマントを買っちゃった」

「素敵って……赤と緑と白のつぎはぎじゃないですか」

「パッチワークという技法だよ。ちよっと値がはったけれども、いい買い物したなあ」

……

そのあと、魔王はオードリィから跳び蹴りをくらっちゃったよ。とほほ

返済生活とはいえ、おしゃれぐらいはいいとおもうんだけどなあ。

「2か月分の返済額を使うとはーボンクラ魔王めー」

今回は魔王ではなく、天界に住む偉い男の日記

黄月6日

魔王が帰って来ない。

青月10日に魔王破産宣言をし、橙月25日に冥府王が負債肩代わり宣言をして2ヶ月もたつのにだ。

やはり、罨なのか？

魔王が破産したのは真っ赤な嘘で、本当は人間界を侵略するのではないのか？

そもそも、魔王が破産なんて馬鹿げた話があるか。

うむ、これは調べた方がいい。

それはそうと、今座っているクリスタル製の椅子。何とかならぬいか、痛くてかなわん。

今回も天界に住む偉い男の日記

黄月13日

魔王らしき者を人間界で目撃したという証言をえた。

やはり、魔王は人間界を侵略し、第二の神魔大戦を起こそうと目論んでいたのだ！

一刻も早く魔王を見つけ出し阻止しなければならない。

それから、魔王を倒せそうな人間『勇者っち』を捜さねば。

妖精王に頼んで妖精たちに『勇者っち候補』を捜してもらおう。候補になりそうな人間を世界中から集めなければ。

………

そういえば、妖精王の娘はかなり美人らしい。これは自ら行こう。

魔王の日記

黄月15日

オードリイがワシの爪を集めている。

「怪しげな薬屋で買い取ってくれるんですよ」

「ワシの爪って効能があるんだ。ワシってすごいんだね」

っていったら、オードリイの目が一瞬だけ怪しく光った。

「……いや、それはまずいな」

ぼそりといって首を振った……

オードリイ。何を考えてたんだ…

黄月30日

今日はすんごい日だったよ。

魔王ねえ、妖精さんみちやったの。

妖精は心がピュアじゃないと見られないんだよ。魔王、超嬉しい。

でもね……

妖精さん。魔王に気がいたら『げっ』って言ったんだ。

さらに『私、勇者っち候補はイケメンじゃないと嫌』と言って飛んで行っちゃた。

イケメン

魔王だってなりたいたいよ。お隣のビスナーぐらいなれたらな、魔王だってハッピー人生るんだったのに
イケメンになりたいー

ところで『勇者候補』ってなんなんだろう？

茶月1日

朝から使い魔（今は鶏に変身中）オードリィに怒られちゃったよ。
とほほ。

何でも、真夜中に突然むくりと起き上がって『魔王、イケメンになりたいー』って叫んだみたい。

『近所迷惑な寝言はやめてください』だって
魔王だって叫びたい事だってあるのだよ。

「オードリィよ、ワシ、整形しようかな」

「寝言は寝て言えー」

魔王なのに跳び蹴りくらっちゃったよ。

本気で考えていたのに……

今回はアンナⅡSⅡドリィ（妖精）の日記

茶月2日

妖精王から魔王を倒せる勇者候補『勇者っち』を探して来いと言われて人間界に来たけれども…見つからないよー。

あたしら妖精を見られる人間自体少ないし、見えても子供ばかり。

この間、大人で見られた人間いたけれども、灰色肌をしたおっさん。超ウケた。

とはいえ、勇者っちを見つけれないと、妖精界に帰れないし、怒られるし、最悪。

どっかにイケメンの勇者っちいないかな。別に勇者じゃなくてもいいや。というより魔王を倒せる勇者候補を見つけたら真面目に魔王退治しないといけないからヤダ。

勇者候補はたくさんいるから、アタシぐらいサボってもいいよね。

今回もアンナⅡSⅡドリイ（職業、妖精）の日記

茶月3日

ついに見つけた勇者候補のイケメン君が

名前はヴィスナー、かなりの好青年。アタシ的には、ちゃらついていた方が良かったんだけど、こんな田舎じゃ妖精を見られるイケメンでも良い方よね。

森で1人歩いている所を見つけて、早速、アタック

「ばんぱかばーん。

オメデトー、あなたは勇者っち候補50人の1人に選ばれました」

華麗に登場したけれども、新しい相棒君はきよんとした。

ま、フツーそうよね。ある日、突然、妖精が現れたかと思ったら勝手に勇者候補にされちゃっているんだから。アタシだったらウケる。

ヴィスナーに事情説明して納得してもらうのに時間がかかった。

アタシが魔王退治がメンドーだからやらない事も言ったら『じゃあ、家で好きなだけくつろいでいたらいいよ』って。

人間も捨てたもんじゃないわね。アタシ、見直しちゃったよ。

無事にヴィスナー宅でくつろいでいたら、隣の人を作ったてのアップルパイを持ってきてくれた。

しかも、その人がこの前の灰色肌をしたオッサンだった。超ウケてお腹が苦しくなるまで笑ってた。

アップルパイは初めてにしては美味しかった。

灰色肌のオッサンは「マオー」さんって言ってた。

まさか、魔王じゃないわよね。そうだったら一生笑っぱなしに

なっっちゃうよ。

魔王の日記

茶月5日

お隣のヴィスナー君が、人間世界のお話をしてくれた。

「毎年、1年最後の月の24日になると、赤い服を着たおじいさんが空飛ぶソリに乗って、世界中の子供達にプレゼントを配るんだよ」「プレゼント。いい子にしていたら、魔王も貰えるかな?」

「……いや、マオーさんは大人だから無理だよ。」

それに、最近の子供たちは信じないから、赤い服のおじいさんの存在が薄くなっているんだ」

「そんな、かわいいそうな子供たち。」

よし、ワシが赤い服のおじいさんの代わりになってプレゼントを配ろうじゃないか

ソリはないから、レッドドラゴンさんに頼んで運んでもらおう」

「……え、と、マオーさん。それはやめた方がいいよ」

レッドドラゴンに乗った魔王がやって来た……

誤解されて下手したら第二神魔戦争になりえないか……てへっ

偽者魔王がやってきた

水色月3日

こうして魔王様は汗水たらして稼いだお金を村長に返して魔王城に帰りました。

めでたしめでたし

：となりたかったんだがのう。

世の中、甘くはなかったのだよ。

「魔王様、サラーサの村に魔王が現れました」

使い魔のオードリィ（人間界ではニワトリに変身している）が変な情報を告げたことから始まった。

「へ？ワシは、ここの村にいるのに、サラーサの町に現れた？

ワシは双子だったかのかね」

『何年魔王やってるんですかつ』とオードリィにつつかれてしまったよ…

「偽物に決まっているじゃないですか」

「ほう、そりゃ大変だのう」

「何、呑気にお茶をすすっているんですか。さっさと支度して行きますよ」

「どこに？」

「サラーサ町に決まっているんじゃないですか。

偽物魔王が我が物顔で占領するなんて、魔界の面目丸つぶれです」

「えー。今日は村人Bさんのお庭でティータイムを楽しむ約束をしてた…」

言い終えないうちに、使い魔オードリィ：様が殺意の眼差しとオ
ーラを放ってきたので、魔王は町へ向かう事になった…とほほ。

と思ったら天は魔王に味方してくれたのだよ…魔王に天はないか…

支度をすませて外へ出たら、お隣のヴィスナー君が居候の妖精さ
んと出てきた所だった。しかも旅支度を整えて。

聞くところによると、ヴィスナーもサラーサ町に向かうとのこと。
もちろん一緒に向かうことにしたよ。

オードリィと2人旅って心細かったから助かったよ。

いや、オードリィの凶暴さに怯えているわけじゃあないよ…

水色月4日

勇者（候補） ヴィスナー

妖精ドリィ

魔王

魔王の使い魔オードリィ

…という一つのパーティができあがり、我々は町に向かったのだ
よ。

さて、サラーサ町は遠くて徒歩は困難だから乗り合い馬車を使う
ことにした。馬車代は返済用にとっておいたお金を使用…完納が遠
のいてしまったわい。

乗り合い馬車があるのは隣町に行くしかなく、ここはテクテク歩いていくことになった。

「やはり偽物なんですね」

イケメンで勇者候補で、魔王の親友（魔王が勝手につけた）ヴィスナーは、ほっとしてくれた。

「実はドリイが妖精のネットワークで魔王が町に現れたから、ただちに勇者候補と共に向かえと言われてね」

ふむ、光の属性さん所も大慌てらしい。こりゃ、大変なことになりそうな予感…

大変といえば、もう一つ…

オードリイと妖精さんの言い争いが耐えません…

やっぱり、光と闇の属性だから相性が悪いらしい。

オードリイの機嫌が悪くなると…魔王、超こわいんですけど…

水色月9日

とうとう着いたよ…隣町に

いやあ〜辛かったよ…オードリイとドリイの激しいバトルが…移動中ずーっとだったんだもん…ワシもヴィスナーも疲れちゃったよ。

口喧嘩に始まって、飛行バトルに隣町に着いたら着いた出激辛の早食い大会…喧嘩というより競争に変わって……しまいには意気投合してね…

仲良くなっちゃったんだよ…ドリィの小さな手とオードリィの羽で握手して友達宣言しちゃったよ…王びっくり。

っていうか…いいのかな？光属性の妖精と魔王の使い魔が…ま、ワシはOKだよ。

仲良ければ、争いなんてないからのう。

…あ、ドリィってワシらの正体って知っているのかの？

水色月12日

隣町から乗り合い馬車に乗って、途中何度か乗り換えること3日…ずっと座りっぱなしで体が痛いわい…魔界にいた頃は良かったのう。部下のドラゴンに乗せてもらったから、遠くの町も10分ぐらいでいけたし…何より魔王だから代金かからなかったし…

何はともあれ、とうとう着いたよ。目的の…サラーサ町に偽魔王に占領された…サラーサ町は…

「あれ？」

いたって普通の大きくて平和な町だった。

ただ、昼間だっていうのに門はしっかり閉まっていて人の出入りは制限していたよ。

ちなみにどの町、ワシらが住む村でもモンスターが勝手に入ってこないように丈夫な囲いと門があって夜はきっちりとしてあるのだよ。（魔王のちょこつと知識）

「あのう…ここは、サラーサの町ですよ」

ヴィスナーが門番に聞いてみると少し肌が白く金色の髪をした門番さんは営業スマイルで答えてくれた。

「はい、水の庭園と魔王に占領されたサラーサ町でございます。勇者っち候補の御一行様ですね。どうぞ中にお入りください」

門番はワシらを入れると再び門をがしやりと閉じた。

「……………」

ワシらは互いに見合わせるしかなかった。

水の庭園か、後で行ってみようっと。

今回は今回は魔王ではなく、天界の偉い男の日記

水色月12日

全ては計画通りだった。

私が考案した『偽魔王で本物と勇者っち候補を鉢合わせにして退治しよう作戦』

その名の通り、サラーサの町を借りて（もちろん魔王が現れたら、うちの部下たちが住民を安全なところに非難させる）魔王が現れたと偽の情報を出して、のこのこ現れた魔王を倒してしまおうというナイスなアイデアだった。

ついでに、妖精ネットワークにも同じ情報を流して勇者っち候補にも来てもらう。

世界中に放った妖精たちだが…好奇心旺盛でなかなか勇者っち候

補を見つけるどこか遊びほうけているらしい…魔王が現れたと聞いたら慌てて探し出すだろう。

つまり、両方の問題を一気に解決できると言うわけだ。

新人だがなかなか気のきく部下を門番にさせて入場者をチェックすれば、後は待つだけ。

今回の計画には大天使様も、計画に参加してくれるから安心安心…

だったのに…

「池の上にある花はなんですかいいね？上品でいいね」

魔王！！！！何でここにいる

しかも魔王の隣で話し相手しているの大天使様やんけっ

「あれは睡蓮っていうんですよ。東の国では…」

………

整理しよう

ここはサラーサ町にある水の庭園。

魔王を待つ私は庭園を眺めながらティータイムを楽しんでいるところだ。

で、池のほとりで花を話して…会話しているオッサン2人は…聖魔戦争でさえ顔を合わせなかった大天使と魔王……

………

ローズティが美味しい

て、現実逃避しないで、この状況、私はどうすればいいんだあ

あのオッサン達は話し相手が誰か知っているのか…

オロオロするしかない私の前に…状況が悪化した。

「魔王さまー」

ニワトリが現れた。人間の言葉を話すのは魔王の部下が変身しているモンスターの可能性が高い。

「マオーさん、はぐれたら迷子になりますよ」

その後から人間が妖精と共に現れた。

「あつれー。大天使様と部下がいるー」

状況を知らない妖精は暴露してしまった…

ああ、神様…

万事休すと頭に浮かんだ…

「魔王さんでしたか。これはこれは気づかなくて失礼しました」

「いえいえいえ。ワシも大天使さんとは知らず、花の話に聞き入ってしまったよ」

「魔王さんは庭や花に興味がありますか」

「ええ。何か、心が癒されますよね」

オッサン2人はまた平和な会話を始めてしまったよ…収集がつかなくなってきた。

「魔界のお城に庭園を作ってみてはどうでしょうか？」

……

「まずは一度、魔界に戻られて土の様子を調べるのが良いですね」
大天使様は…遠回りに魔王を帰らす方向に持っていた。

「そうですね：そうしたいのは山々なんですが…」

魔王はニワトリに視線を向けるとニワトリもうなづいた。

「今回の一件が片づいたら、一度もどって部下たちに顔を見せた方がいいですね。部下たちに忘れられないうちに」

「うむ」

「返済はそれからでもできますし」

「そうじゃの…」

魔王が大人しく魔界に戻ってくれば倒す必要はないし。

「それはそうと町を占領する魔王は？」

妖精は忘れたままで良い事を口にした。

「町はいたって平和ですよ」

「やだー嘘だったの？」

「いいじゃないか、ドリィ。争いのない平和な町ならば」

勇者っち候補が微笑むと、一気に空気が和らぎ、すべては解決と解散になった。

報告書、どうしよう？

勇者っち候補が無血で魔王を説得させたことにすれば、上のお堅い連中も納得するだろう。（あとで大天使様と相談する必要があるが…）

一つの町を借りて大掛かりな事をしたんだから……人間の手によって解決した方が後処理も楽になる。

庭園に現れた勇者っち候補が無血の勇者に仕立て上げよう。

終わりよければすべてよし。

水色月27日

魔王、故郷に帰って、今日、村に戻ってきたよ。

久しぶりの魔界城は…借金騒動が起こる前と変わらない状態だったよ。

魔王、久しぶりにセレブ生活あじわっちゃった。お肌すべすべになったし。

魔王っていいね…

いつまでも城にいたかったんだけどね…人間界の返済がね…

ま、リモット村に帰れば親友ヴィスナーや妖精ドリィに合えるし。

村人さんもいるし。

魔王には二つの帰れる場所がある…これってすごくない

魔王、超幸せ！

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4832t/>

魔王につき

2011年9月1日03時24分発行